

桂島宣弘・衣笠安喜「書評と紹介 庄司吉之助著『近世民衆思想の研究』』『日本史研究』二一三号、一九八〇年五月。

本書は、会津地方を中心とした江戸時代全時期に亘って民衆思想史を分析したものである。その内容は、第一章領主・儒者の思想 第二章農民の自己形成と意識の展開 第三章会津藤樹学の発展と豪農の思想 第四章領主代官の文教政策 第五章儒者安積良斎と神林復所の思想 第六章豪農儒者と農民自立の思想 第七章菅野八郎の思想、というものであり、この構成から窺われるように、独特な視点に貫かれた「民衆思想史」である。もっとも、本書は新たに筆を起したのではなく、著者が昭和四六年（一九七一）『日本思想大系 民衆運動の思想』（岩波書店）の編纂に携わって以降の論文を纏めたものである。しかしながら、このように一冊になってみると著者の近世思想史関係の諸論稿が、一貫した視点に立つものであったことが改めて明瞭になり、われわれの学ぶ点もまずここに在る。

著者の視点はその序文に示されている。「近世の民衆がどのように自己形成をはかり、どのような世界像をもったかを解明するには歴史の構造分析を行うと共に、民衆が日常生活の中で絶えず自己を鍛錬し、自己の思想を形成していった経緯を究めるという視点からの研究にもとづかねばならない。」この視点を土台に、著者は独自の視点乃至方法で民衆思想にアプローチする。

すなわち、著者は民衆思想を飽くまで支配思想との連関で捉えようとしている。支配思想が如何に民衆に受容され、読み替えられ、発展していくのか、ここに民衆思想形成の基点を求めた著者は（一）領主（武士）（二）儒者（三）農民の三者の自己形成を追跡し、その中に民衆思想を位置づけようとする。この根底には「四階級の徳目の受取り方は同じであろうか」という問題意識が働いている。結論から言えば、それが異なる筈であり、しかも同じ思想的土台に立っても、農民は農民なりの思索展開を示す中で新しい意識へと到達していくという確信が、本書の視点を支えているのである。

翻ってみるに、この問題意識は著者が長年温めてきたものである。すなわち、著書は既に昭和二七年（一九五二）発表の「変革期における農民思想の問題」（『歴史学研究』第一六〇号、のち『論集日本歴史・自由民権』有精堂に再録）において次のような見通しを述べている。幕府や藩の学者や思想家によってもたらされた朱子学が農民層に普及した場合、それは地主層、豪農層、中農層等によって受け入れ方が異なるのであって、単に封建反動的教学の役割を演じるものの他に、封建体制批判の実践的役目を果たし得たものもある筈である、と。しかも、その系譜の中には世直し思想から自由民権思想に連なる流れが存在するのである、と。

この主張が果たして十分に論証し得ているか否かは最後に考えるとして、ここではこの積年の問題意識が本書の基底に存在している点を確認しておきたい。加えて、思想を社会的背景によって解明せんとする著者の姿勢がこの問題意識を活々と浮彫にしている点も看過し得ない。長年、会津地方を中心に農民の史料蒐集に努め、その経済構造の分析に琢磨してきた著者ならではの手腕である。確かに整然とした論理スタイルと緻密な概念規定に重きを置く思想史研究書に慣らされた者にとって、本書は異色なものに映るであろう。しかしながら、思想内容が必ずしも豊富でない民衆思想研究においては特に社会的背景の分析に基づく基底的研究が不可欠であろう。そして、こうした方法によって初めて江戸時代全時期に亘る民衆思想史の叙述が可能になった点は、民衆思想史研究において貴重な指標が与えられたことを意味している。今日、民衆思想史研究の高まりが見られる反面、全時代的な見通しに欠ける研究が少なくない。史料が矢継ぎ早に発掘・公刊される中で、民衆像はますます多様化し混乱さえ来しているのも、一つにこの見通しの欠落に依るものではなからうか。もとより、この作業は容易なものではない。そうであればこそ、本書は初めて一貫した視点と方法に基づいて近世全時期の民衆思想史を描いたものとして、今後の研究の一つの礎石たり得るものであることは疑いない。

さて、以下右の視点に留意しながら、本書の概要を見てゆきたい。

第一章. ここでは幕藩体制の確立期、寛文延宝期から享保期頃までの領主側の思想が検討される。ここで取り上げられるのは、保科正之、横田俊益、無為庵如黙、淵岡山等である。著者は、この時期をしばしば安易に論述されるような一元的思想＝近世儒学の確立期と見ない。著者は、神儒一致、儒仏一致の思想状況に注目する。そして、神儒仏三思想の三つの流れが存在し、相剋しながら支配思想を形成する時期と捉える。それは時に優劣の差は有りながらも「忠孝」を中心とし、それに「敬」を配する点において相互に補完し合うものとされる。ここに登場する人物は、横田俊益を除けば、いずれも多元的思想に影響された人物なのである。これらが「入り乱れて相争うに至ったのが、この期の特徴であり藩の文教政策の生みの悩みであった。」と著者は言う（本書三二頁）。従って、確か

に混沌とし整合性を欠くように見えるが、しかし大きくみれば忠孝思想として支配思想が形成される時期として、この期を把握することができる。

第二章. 幕藩制社会の確立期は農村において複合家族から単婚家族の成立する時期に照応する。農民の思想形成を探る上で、著者はまずこのように農村構造の変容を設定する。この変容の上に農民は如何に自己を鍛錬してゆくことになるのか。ここで著者は守本順一郎氏の問題提起を受け止めようとする。すなわち、農民の徳目を集中的に表現する「孝」は、非封建的な家父長制下における子の無主体的恭順を示すものであるが、家父長制解体と共にその反動としての家父長制的意識の拡大を生み出す。そこには、反動を招来する新しい意識とその基盤が成立していた筈であるとする提起である（守本『日本思想史の課題と方法』）。

著者は、これを「新しい意識となった孝」と呼ぶ。すなわち、家父長制的複合家族における上からの無主体的恭順を強いる「孝」と農民自ら意識している家族内親子関係における「孝」とは区別される、と著者は主張する。この主張の背景には、この時期の農民の思想形成を、自らの意志を表示し得る段階までに至った「自己形成」の過程と設定した著者独自の視座が存在している。「自己形成」は「迷惑」「わび言」の表現から出発し、やがて複合家族から単婚家族への分裂によって著しく促進されたと見ているのである。その過程において、「孝」は「新しい孝」になってとされるのである。

第三章. 「孝」思想が農民において如何に展開されていくのか、それがこの章で会津藤樹学の展開として示され、この章は本書の中でかなり重要な部分を占める。第Ⅰ期（延宝～享保）は、会津に藤樹学が導入され普及してゆく時期である。ここでは、豪農が一方で単婚家族を中心とする均質的な百姓身分であると同時に、他方で郷頭の村役人として家父長制的な封建共同体の頂点に存在する、言わば二重の性格の矛盾の中で自己を発見し、「孝」思想を受容してゆく姿が描き出される。具体的には、東条長五郎の「東条子十八箇条門記」が分析され、二重の性格の矛盾をもつ旧慣生活の克服が藤樹学を通して試みられていると結んでいる。この分析は守本氏の藤樹学の分析に導かれたものではあるが、極めて説得力に富む見解である。第Ⅱ期（享保～宝暦）は、藤樹学の普及の時期であるが、寛延一揆が農民の自立を著しく促進した時期でもある。著者は、この一揆に見られる農民自立には藤樹学の自意識の影響があるのではないかと推測されている。第Ⅲ期（宝暦～文化）は、藩の教学が徂徠学から朱子学へ転換し、又、心学が教化に取り入れられてくる時期であるが、藤樹学は衰退に向かい、その再興は神儒両道として計られてくるという。このように藤樹学が「修養の目標を高め神道的宗教性へと傾斜」したとする指摘は、一九世紀における他の思潮との関連からも注目すべき指摘であろう。著者は、これが祖述者達が藩の神学や朱子学の普及に押しきられたためと考えておられるようだが、思潮の一般的動向との兼ね合いで見れば、右の見解では説明し切れない興味ある問題を孕んでいるように思われる。第Ⅳ期（文化～安政）は藤樹学の衰退期である。だが著者は、新たに起こった世直し一揆の思想と藤樹学の関連を凝視する。ここで著者は、農民達が受け止めた藤樹学が、今度は祖述者達への攻撃となってはね返ったのが世直しの論理ではないか、と大胆に推測する。この推測は冒頭に述べたような著者の長年の視座に基づくものであろうが、著者自身も未だ未整理であると告白されているように十分に説得的ではない。

以上のように著者は農民の思想を「孝」を中心に捉え、藤樹学の展開の中に支配思想と民衆思想を繋ぐ架橋を見出している。しばしば指摘されるように、会津藤樹学に影響を与えた淵岡山は、同じ藤樹門下の熊沢蕃山とは或る面で対照的な思想家であり、その思想は特に庶民に伝播した。この点についても本章の分析は新しい視覚を提供するものとなろう。

第四章. ここでは幕藩体制の危機における領主、代官の文教政策が検討される。まず松平定信の思想として、改革に信念と実践的朱子学の信奉・腐儒批判があげられる。勿論、定信論としては本章は不十分であるが、著者の視点が民衆思想にある以上、それが文教政策を中軸に据えたものに限定されるのは当然であろう。著者によると、この期の農民教化策は心学が大巾に取り入れられたにも拘わらず、寛文～元禄期の教化策の採用しか方法が無かったという。農耕奨励、儉約、人口増殖が教化策の中心であったことは異論の余地がないが、農民の「自己形成」に関わるものとしての心学導入の意味づけが欲しかったようにも思われる。

第五章. 幕末期の儒者安積良斎と神林復所の思想が紹介されるが、水戸学等の幕末期諸思潮との関連においても興味のあるところである。良斎においては、正気論に似た是気論、格物致知と知行合一に基づく実践性の主張、忠孝一元論、愚民観、実学の主張等において明らかに水戸学と共通した思潮が色濃く出ており、又、神林復所の封建制再編論、国体論、幕領地の組替え、攘夷論も同様である。但し著者は、実践性を中心に水戸学との関連を考えておられるようだが（一二二頁）、まず会津儒学史の中でのこれらの思想の位置づけが是非必要であると思う。その

中から水戸学と朱子学、徂徠学の連関について新しい視点が生まれてくるのではなかろうか。この章においては史料紹介が大半を占めており、著者の分析は少ない。ここで利用されている史料は未刊のものがあると思われるので、機会があれば公に紹介して頂きたいものである。

第六章. 藤樹学と世直し思想を結ぶ架橋の部分を取った章で、寛政から幕末にかけての近世農民の自立思想が分析されている。ここでは、著者が豪農儒者と心学者とを対照して検討し、「この相反した思想は、幕末思想史の上で見逃すことのできないものである」とされている点が注目される。熊坂台州は、居村持高九一石余、出作高一三五石余の豪農であるが、打ち続く凶作の中で徂徠学の影響を抜け出し、陽明学の知行合一に依りながら貧農救済事業を行う。思想転換の背景に農村構造が横たわっていることが著者によって鋭く洞察される。

一方、早田弘道は百石前後の持高で半田銀山の経営を行う地主であるが、心学舎（のち勸善社）を結成し、天保一四年以降心学の普及を進める。それは中沢道二の関東心学が東北諸藩に波及する時期と照応するが、著者によると会津藩では代官でなく民間人の早田家が主導した点に特色があるという。「このことは実質的にこれらの有力層が農村を支配する陣列ができあがっていたことをものがたる」という指摘は、心学の農村における展開を的確に表現している。しかしながら、このような心学も法度の遵守と儒教を教学とする限り、もはや荒村状況に有効に対応することは困難だった。やがて早田家が打ち毀しの対象となった事実は、心学の思想的位置を鮮やかに示すものであろう。

さて著者はここで近世農民の自立思想について小括を加えている。尾形庄九郎の覚書（文政一〇年）を史料としながら、著者は五倫＝儒教道徳が「正徳」と称されて日常化し読み替えられている点、この中で特に「誠」が日常生活の規範、善悪正邪の判断の基準となっている点、家業と隣郷の和合の要に「孝」が位置していること等に注目し、ここから自己の発見、現実社会の批判が生み出されると述べている。しかし、それは封建的職分規制によって限界を有し「自由思想として発展するまでには、なおいくたの段階があった」とされる。

第七章. 本章は本書の締めくくりとして、慶応二年岩代国信夫伊達両郡におきた百姓一揆の指導者と目された菅野八郎の思想発展が追跡される。前章までに考察された、農民の日常生活の中での思索が急速に開化していく様が活々と描き出される。著者の抱いていた視点——儒教が農民に普及した場合、幕藩体制批判の思想として再生され、批判思想の基底を与える——が最も鮮やかに主張されている部分である。著者は、ここでは明確に菅野八郎の思想を熊坂台州の陽明学より発展した世直し思想と基底する。（ちなみに、八六～八七頁の叙述ではこのような明確な規定は避けられている。）それは、直接には八郎の父和蔵が熊坂台州の門弟であったことに基づく。それが如何なる思想関係を有するのかわかりませんが、農民としての知行合一の実践という観点に絞るならば、確かに或る連続性乃至一定度の影響は認められよう。

さて八郎の思想が「信」と孝を信条とするものであったことは周知の通りである。ことに「孝」が根本倫理とされ、この下に神儒仏三教は相対化される。この孝道は「八老十ヶ条」に明らかのように、儒教の五常の実践、通俗道徳の実践を超出るものではないが通俗道徳の行われていない現実を発展する時、鋭く現実を批判する武器となる。事実、八郎の結成した「誠信講」は、やがて世直し一揆の指導的役割を担うのである。

本書は以上のように会津藩を中心とした近世全時期に亙る民衆思想史を大胆に構成した大作である。会津藩が中心となっているが、「会津藩が近世封建社会の典型」と言い切る著者にとって、鋭く普遍化する問題を見据えた洞察であることは最初に指摘した通りである。それは、支配的思想、特に儒教が農民に普及していく場合、それが如何にして内在化し、やがて批判の武器となっていくか、という問題であった。かつて安丸良夫が、通俗道徳のもつ積極的意義に注目し、「通俗道徳的生活規律は封建思想、前近代思想一般に解消すべきものではなく、近代社会成立過程にあらわれた特有の意識形態であること、この意識形態は、支配階級のイデオロギーである儒教道徳を通俗化しつつ村落支配者層を通じて一般民衆にまで下降せしめたものという規定性を持ちながら、しかもじつは民俗的習慣を変革させて広汎な民衆をあらたな生活規律、自己鍛錬へとかりたてる具体的な形態であった」と指摘したことが、ここで想起される（『日本の近代化と民衆思想』）。ところで著者の場合、通俗道徳的生活規律を「近代社会成立過程にあらわれた特有の意識形態」と捉えず、近世全時期に亙る民衆思想の発揚過程である、とされる。このことによって、通俗道徳的生活規律自体は固定的に把握されるのではなく、問題なのはむしろその「意味」「徳目の受取り方」の内面的変容として、極めてドラスチックに描き出される。安丸氏の立論が近世前半期に全くといっていい程度触れられていない陥穽を鋭く働くものとなっているのである。更に、安丸氏は儒教道徳の「下級」と言いつつ、その連関にまで考察を加えていない。しかしながら、著者にとっての関心は最初からこの連関である。支配的思想と民衆思想の粘着的皮質が具体的分析の中で一枚一枚丁寧に剥されていくのである。このように著者

は安丸氏の方法がややもすると陥りやすいシャーマ的民衆思想の把握を、近世全時期を射程に入れることで免れている。

しかし幾つかの問題が残る。例えば、著者は具体的に陽明学（藤樹学）を媒介とした「孝」が儒学と世直し思想を結ぶ役割を担ったと考えておられようだが（二二四頁）、この点については疑問を提示せずにはいられない。儒教倫理が農民に普及する中で、農民の内面的主体性の確立に一定の影響を与えたとする指摘は首肯しうる。一般に、思想的表現は既成の思想を利用することなしには、ほとんど不可能であるということもある。しかしながら、幕藩体制確立期の豪農層が藤樹学に依って自立に向かった点はともかく、それを幕末期の底辺の民衆に結びつけ、世直し思想と関連づけて理解するのは無理があるのではなかろうか。本書でも、藤樹学が安永九年以降衰退に向かったという指摘があっても、その原因は不明となっているが（八三頁）、実は藤樹学の農村における積極的役割はここで一度終焉したとすべきではなかろうか。勿論、伏流として思想的土壌を提供したことは十分に考えられることである。とするならば、むしろ第二章第三節の視点——新しい孝の仮説——を積極的に展開して、世直し思想の思想前提とする方が、より内面的主体性に即した論旨となるのではなかろうか。いずれにしてもこの問題は近世民衆思想の全体の把握に関わる重要な問題であり、慎重な検討が必要であろう。

さて、この他に本書の問題点と思われるものを最後に記しておきたい。

第一に、支配者側の思想に関わる問題として、本書で言う封建制度の再編成が如何なる再編成なのか言及して頂きたかったと思う。この点の弱さが、第四・五章の歴史的意味付けを極めて曖昧なものとしていることは否定し難い。大まかにみて近代への転化の芽を有した再編なのか、反動的再編なのか、そして安積良斎や神林復所らの複雑な思想がそのどちらを表現した対応するものなのか、著者の意見を是非お聞きしたいところである。第二に、農民の「自立」について明確な指標とそれに基づく段階規定、時代規定を提示して頂きたかった点である。第二章の「自己形成」、第六章の「自立」、第七章の世直し思想について、各々その発展段階を規定することは本書に示された史料分析によって或る程度可能であり、その段階規定と関連づければ遙かに系統的な追跡が可能になったと思われる。第三に、著者は屢々「漢文の読み下しの誤り云々」と述べられているが、未刊の史料が多いために、読者にとって検討する術が無い点を考慮して頂きたかったと思う。原文を提示して頂ければ良かったと思うが、いずれにしても未刊のものについては一日も早い公刊を願わずにはいられない。

最後に本書の強みは、著者の他の著作と同じく、何といても豊富な史料を駆使している点であり、読めば詠む程、味わい深いものとなっている。従って又、論旨の多少の飛躍も史料自身によってカバーされており、全体として手堅い述作となっている。この意味でも後学者にとって利用価値の多い著作であるといえよう。果たして著者の意図したところを十分に理解し得ているかどうか、的はずれの点があれば、著者のお許しを頂きたい。

〔付記〕本書評は、桂島、衣笠および福井純子の三名の合評を桂島の責任において文章化し、その草稿に衣笠が若干加筆した。最終の文責は桂島にある。